

「徳成随風」(14)

2013.09.03

佐藤喜一さんと中原中也詩碑

桑高同窓会長 西羽 晃

7月の末に佐藤喜一さんから『鉄道エッセイ・感想文集 幾山河こえさり来つれど』と題する自費出版の本を頂戴した。佐藤さんは1930(昭和5)年生まれ、永らく都立新宿高校で国語の教員をしておられた。その一方で鉄道マニアであり、各地の鉄道路線・駅を訪ねてはエッセイを書いておられる。

最初のきっかけは中公新書の『鉄道の文学紀行 茂吉の夜汽車、中也の停車場』(2006年1月刊)を新光堂書店で私が買ったことである。その本にはJR桑名駅のプラットホームに建っている中原中也の「桑名の駅」を刻んだ詩碑が大きく紹介されている。この碑の建設を私が思い立ち、多くの方々の協力をへて、仲間とともに桑名駅開業100周年の記念に建てたのである。



桑名駅下りホームにある中也詩碑と説明版

佐藤さんに詩の建設経緯などを書いて送ったら、『されど 汽笛よ 高らかに 一人人たちの汽車旅』(平成14=2002年)という著書を恵贈され、その後も『たまゆらの旅路』(2008年)と今回の『幾山河こえさり来つれど』(2013年)を頂戴している。国語の先生なので、文学作品を織り交ぜてのエッセイで、文章も読みやすく、楽しい文集である。私も鉄道マニアほど凝っているわけではないが、鉄道大好き人間なので、大いに共感しながら、一気に読んでしまった。

中也の「桑名の駅」を私が初めて知ったのは、大学生の頃に桑高時代の友人

から教えられた。昭和33年(1958)9月号の『中央公論』に掲載されていた。書き出しは「桑名の駅は暗かった」で始まる。その後に出された『桑名市史補編』でも「桑名の駅は暗かった」である。詩碑建設に伴い原典を調べてところ、昭和12年12月号の『文学界』が初出であり、「桑名の夜は暗かった」とある。「夜」が、いつの間にか「駅」になってしまったようだ。文章は一度書いてしまうと、それが孫引きされて、間違いのまま流布してしまうことが多い。自分が文章を書くときも自戒している。

ところで佐藤喜一さんは都立新宿高校の前身の府立第六中学校に入学し、学制改革で新宿高校を卒業された。のちに新宿高校に24年も勤務されたが、定年まで4年を残して退職された。退職の理由は教員の強制的配置制度が実施され、同一校に永年勤務することができなくなったことに嫌気をさしたとのことである。我が桑高でも昔は桑高だけで永年勤務された先生が多かった。鷲野校長は10年間も校長であった。最近では校長で3年程度、一般の教員でも7～8年程度らしい。卒業生としては母校を訪れても、在学時代の先生には会えないので、母校への足も遠のくのである。

佐藤さんは母校出身の教員で、同窓会の担当もしておられたので、同窓生・同窓会のことも多く書いておられる。そんなことから『桑高百年』(桑名高校創立百周年記念誌)がほしいとのことで、私の家内の分が余っていたので贈った。その返事には「都立日比谷高校(旧府立一中)の100年史よりも貫禄という点では、桑高の方が上でしょう」とお褒め頂いた。日本を代表する日比谷高校よりも貫禄があるとは、外交辞令の言葉かもしれないが、編集にあたった私にとっては光栄の限りである。

